

日本看護科学学会第45回学術集会（新潟市）
ランチョンセミナー6
2025年12月6日

事例研究の学術性： 査読における実証主義と解釈主義

山本則子

東京大学大学院医学系研究科
高齢者在宅長期ケア看護学分野
グローバルナースングリサーチセンター

2025/12/06

日本看護科学学会 COI 開示

筆頭者氏名 山本則子

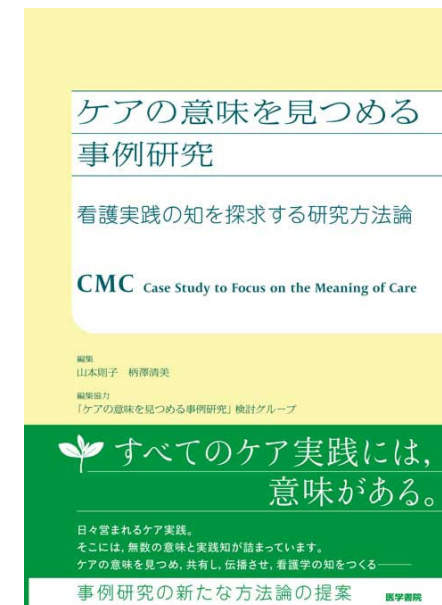
所属名 東京大学大学院

- 演者は日本看護科学学会へのCOI自己申告を完了しています。
演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある
企業・組織および団体等はありません。

本日の話題

- ① 優れた実践を可視化・共有可能にしたい
- ② 査読の経験
- ③ Big Qとsmall q とBig Q Qualitative Research Guide (BQQRG)
- ④ 事例研究の普遍性問題・CMCの学術性問題
- ⑤ CMCの執筆・査読ガイドの提案

Copyright © 2025 Yamamoto-Mitani N



本日の話題

- ① **優れた実践を可視化・共有可能にしたい**
- ② 査読の経験
- ③ Big Qとsmall q とBig Q Qualitative Research Guide (BQQRG)
- ④ 事例研究の普遍性問題・CMCの学術性問題
- ⑤ CMCの執筆・査読ガイドの提案

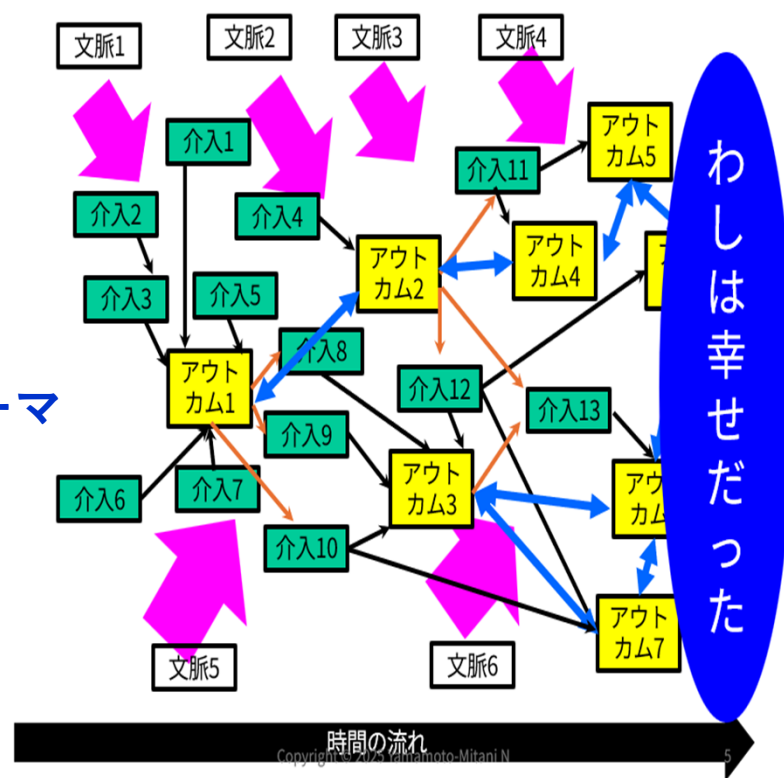
優れた実践を可視化・共有可能にしたい

■看護は対人のケア実践だから

1. 患者・看護師の多様な文脈の詳細が強く影響
2. 一つの看護行為は多様な目的
3. 一つの目的のために多様な支援を積み重ねる
4. 生身の人間との相互作用を中心としたライブパフォーマンス
5. ケアリング・積極的関心と善意

求めるアウトカムは多側面が統合された

「**わしは幸せだった**」



実践知「フロネーシス」を可視化したい

- アリストテレスが人間の知的な部分（真理を把握する魂の性向）とした5つのうちの1つ（「ニコマコス倫理学」 p.44）
 - テクネー（技術）：気道粘膜を傷つけずに痰を吸引する技
 - エピステーメー（学問的知識）：起因菌に対して有効な抗菌薬の知識
 - **フロネーシス（実践知）**：先の予測が難しい中でも目の前の患者にとって最善の治療が何か分かり行える能力
 - ソフィア（智慧）
 - ノース（知性）
- 達人の直感：「理性に基づかない判断であり、計算的な論理に頼ることのない直接的な懸念や反応」（Benner, Tanner, Chesla, 2015, p.287）
- 暗黙知：私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる（Polanyi, 2003, p.18）

対人援助実践の知を創るために

ポイント 1：事例研究が必須

対人の実践・・・個別性

ポイント 2：ナラティブが必須

ナラティブでないと表現できない実践

ポイント 3：問われ語りが必須

問われ語り浮かび上がらせる実践の意味

ポイント 4：メタファー（比喩）が必須

状況の認知、判断、意図を未分化なままシンボリックに伝える

ポイント 1：事例研究が必須

- **文脈に埋め込まれた実践の展開（フロネーシス）**の様子を把握
- 要素に還元できない全体性としての「実践」
 - ケアを部分に分けられない
 - 行為と思考を分けられない
 - 認知と情動を分けられない
- 実践 = ライブパフォーマンスの中にある技を浮かび上がらせる
（一回性）

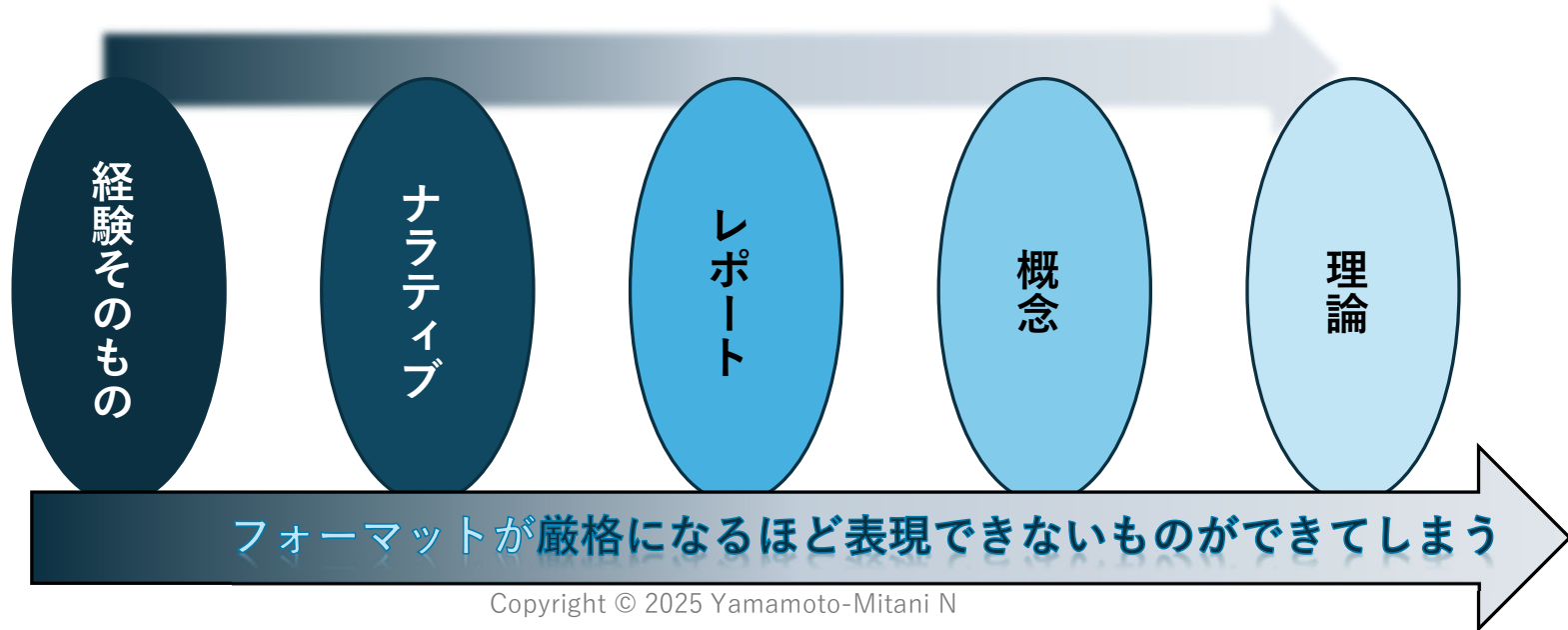
ポイント2：ナラティブでないと表現できない実践

～ある事例研究の取り組みの際に起こったこと～

- 看護師は、ワークシートを書いたり、それに研究者・上司・同僚からコメントされたりしているうちに、**事例の中心テーマが見えなくなっていました。**
- 初期の関わりから**注意深く聞いていった**ところ、訪問看護利用者への初回訪問で、とにかく利用者に嫌われないようにすることを目標とし、その空気感を読み取り「空間から攻めた」、利用者と「ウマが合った」などと、**生き生きと語られ始めました。**
- はじめワークシートに手書きで**なぐり書き**してあり、そこには利用者・家族との**豊かなやり取り**が書いてありましたが、その後、ワークシートに打ち込んで研究の形にすることを意識したところ、豊かなところが**消えて**しまいました。

ポイント2：ナラティブでないとは表現できない実践 ～フォーマットフリーのナラティブ～

- 文語体（書き言葉）ではなく口語体（話し言葉）：口語でなければ表現できないものがあるから（「語る言葉」Merleau-Ponty（佐野, 2019, p.186））
- 「ナラティブ」=表現のためのフォーマットがとてもゆるい。「文字」にする以前、「経験そのもの」と未分化なところを残している。



ポイント 3 :

問われ語りが浮かび上がらせる実践の意味

～事例研究と取り組み当初の書き出し内容～

- 80代男性Kさん、認知症、誤嚥性肺炎。介護者は妻(80代)。

「発熱を繰り返しているK氏に対し、(往診医は)胃ろうを勧めていた。・・・妻から(訪問看護師が)相談を受けた。・・・ご家族がすぐに拒否しなかったところを見ると、まだ迷いがあると感じ取れた。そこで妻の訴えを引き出すことにした・・・。」

「我々は誤嚥性肺炎の再発を予防するために、経管栄養を確実にできるよう指導し、吸引や排痰の援助を実施した。介護負担を少なくするために、訪問看護時に排便ができるような排便コントロールを実施し、高齢である妻の介護負担の軽減を図った・・・。」

「・・・妻からは、『お口からものを食べられるようになるかしら』という言葉が聞かれるようになった。・・・主治医に相談し、嚥下リハビリを実施し、ゼリー食の開始を試みた。誤嚥のトラブルもなく『うめー』『アイスが食べたい』と喜ぶK氏を見て、妻は喜んだ。」


ポイント 3 :

問われ語りが浮かび上がらせる実践の意味

～経験の意識化に必要な語り合い～

- どうしてこの事例を発表しようと思ったか？
 - 代理の意思決定支援が大変そうだった
 - うまく納得して意思決定ができたと思ったから、支援としてはうまくいったような気がする。
- 代理意思決定のために、何をしたか？
 - まず、排便処置が大変だったので排便処置を・・・
- 意思決定支援が排便処置??
 - だって（怒）、あまりに介護が大変で意思決定どころではなかったもので、まずはそこから思っ
て・・・
- 何をどのように意図して（関心を持って）看護行為をしたのかは、必ずしも明確に意識化されていなかった。が、問われて語っているうちに、あまり意識化されていなかった意図が認識され言語化される。
- 問われて語り、複数のメンバーで語り合ううちに、どのような言葉を使えば共通理解できるかが合意できる >> **他の人を触発できる言葉・語りになる**

ポイント4：実践の意味を説明するメタファー

- 「客観的な記述」に終始しがちだったこれまでの事例研究
 - * 何を読み取ればよいのか・・・何が違いを生んだのか、把握しにくい
 - * 他の人がどこをどのように参考にしたらよいかわかりにくい
- 
- 「メタファー」「大見出し」「小見出し」の活用：実践のコツ・意図・意味を、**未分化なまま端的な言葉**で表す。
 - * 経験から「見出し」へ：ポイントに焦点化しやすい
 - * イメージを喚起するメタファー：他者が意図的・意識的に理解しやすい
 - * 読者を**触発**する言葉

ケアの意味をみつめる事例研究（CMC）：

「看護の実践知」を共有可能にするために

- ケアの意味・意義に関する「**メタファー**」
- メタファーに着想された「**大見出し（ケアの意図）**」「**小見出し（ケアのコツ）**」
- 「見出し」によって統制された**ケアの構造化（「表」**）
- 時間の流れに沿って、**ケアの展開を実践者自身が詳述**する
 - 「見出し」：ケアの意図・コツを端的に表現し直観的な理解を可能に
 - 「本文」：実践者自身による一人称的記述で追体験を可能に



- 「見出し」＋「本文」で読者を**触発（読者が自らの経験に照らして、「揺さぶられる」）** >> **世界・患者・ケアに対する新たな洞察へ**

世界観・患者観・ケア観の変容と、「これまでとはひとあじ違う」看護実践の進化

本日の話題

- ① 優れた実践を可視化・共有可能にしたい
- ② **査読の経験**
- ③ Big Qとsmall q と Big Q Qualitative Research Guide (BQQRG)
- ④ 事例研究の普遍性問題・CMCの学術性問題
- ⑤ CMCの執筆・査読ガイドの提案

これまでに発表された論文

- 1) 安塚則子, 森元陽子, 和智理恵他: 訪問看護職が実践する家族介護者への代理意思決定支援－胃瘻造設の決定を支援した訪問看護の事例. 家族看護学研究, 20 (2): 68-78, 2015
- 2) 岩戸さゆき, 池田真理, 吉田滋子他: 医療的ケアが必要になった重症心身障害児の在宅復帰を可能にした看護－母の本当の願いを引き出し実現した事例から. 家族看護学研究, 23 (1): 52-63, 2017
- 3) 大竹泰子, 野口麻衣子, 野原良江他: 最後の療養場所に関する意向の相違を抱えた家族に対する訪問看護師による意思決定支援. 家族看護学研究, 23 (1): 64-74, 2017
- 4) 佐藤美雪, 野口麻衣子, 阿部智子他: 家族主導で在宅看取りの意思決定が進む中で訪問看護師が行った看取りまでの看護実践－慢性呼吸不全高齢者の在宅看取り事例を通して. 日本在宅看護学会誌, 7 (1): 225-234, 2018
- 5) 花田美里, 赤井畑明里, 長尾祥子他: 安静指示のある脊椎疾患患者に提供された「あうんの呼吸」による看護. 看護研究, 52 (4): 254-263, 2019
- 6) 土本千春, 野尻清香, 柄澤清美他: 自分を伝えないAYA世代終末期患者の残された「今」を支えた看護－語りあえない家族をゆさぶる－. 家族看護学研究, 26 (2): 188-200, 2021
- 7) 野尻清香, 柄澤清美, 柳原清子他: 緩和ケア病棟における終末期の自覚がない患者の退院支援－積極的対話で真意を把握し在宅へのレールを敷く－. 日本がん看護学会誌, 35: 353-359, 2021.
- 8) 米村法子, 野口麻衣子, 二見朝子他: 入院を機に難治褥瘡を有する療養者と家族の在宅看取りを実現した看護実践: 事例研究. 家族看護学研究, 27(2): 128-141, 2022.
- 9) 田嶋ひろみ*, 柄澤清美*, 雨宮有子, 吉田滋子, 山田妙子: 重症心不全患者と家族の穏やかな自宅療養継続を支える訪問看護師の実践－「ケアの意味を見つめる事例研究」による分析－. 家族看護学研究, 29: 37-50, 2023.
* 共同第一著者
- 10) 富永知恵子, 野尻清香, 柳原清子, 今井美佳: 痛みをもちながらがん治療を続ける患者の治療中断の選択に伴走する－核心がつかめない患者とのやわらかな対話から－. 日本がん看護学会誌, 38: 72-78, 2024
- 11) 平山美智子, 吉田滋子, 齋藤凡: 抑うつと認知機能低下があり救急搬送が頻繁だった独居高齢者の穏やかな在宅生活を可能にした訪問看護実践－「ケアの意味を見つめる事例研究」を用いて－. 日本在宅看護学会誌, 14(1): 24-33, 2025

よくある査読意見

- 客観的でない（客観性）
 - 一般化可能性（普遍性）がない
 - 著者の思い込みではないですか
 - どこが新しい発見なのですか（新規性）
-
- CMCの論文を書くのは難しく、見出しや記述に不十分な点が起こりやすいことは確か。
 - でも、実証主義に基づく研究ではないCMC論文に対して、実証主義の学術性に基づく査読がなされてしまう、という悩みも。
 - 実証主義にもとづく研究ではない研究の学術性の検討・執筆/査読ガイドが必要。

本日の話題

- ① 優れた実践を可視化・共有可能にしたい
- ② 査読の経験
- ③ **Big Qとsmall q とBig Q Qualitative Research Guide (BQQRG)**
- ④ 事例研究の普遍性問題・CMCの学術性問題
- ⑤ CMCの執筆・査読ガイドの提案

質的研究の背景となる認識論・存在論は多様

- 内容分析・テーマ分析・グラウンデッドセオリー・エスノグラフィー・現象学的研究…
- 大きな区分は実証主義 vs. 解釈主義 — — — パラダイムの違い
- 実証主義（**法則定立的な知**を求める）：経験的（実証的）事実によって知を証明・正当化する立場（望月, 2025, CMC書籍第7章 p.129）

>>> **small q** qualitative research (Kidder & Fine, 1987)

- 解釈主義（**個性記述的な知**を求める）：モノ・現象がどのような見え方（認識のされ方）をするかは、私たちの認識枠組みによって左右される、という考え方

>>> **Big Q** qualitative research

Virginia Braun & Victoria Clarke (2025). Reporting guidelines for qualitative research: a values-based approach, *Qualitative Research in Psychology*, 22:2, 399-438

Copyright © 2025 Yamamoto-Mitani N

19

BigQ Qualitative Research Guideline

(BQQRG): *Big Q*に不慣れな査読者・編集者向け注記 (抜粋)

- 研究者が特定の（支配的な）理解に迎合するのではなく、自らの用語使用を説明することである。
- 構造化された抄録は、伝達される情報の範囲や方法を制限する可能性がある。
- 複数の記事にまたがる質的研究を報告することは正当。
- 研究と報告書は方法論の一貫性／整合性を示すべきである：理論的前提、研究課題、方法論、データ生成・分析の実践、研究目的などが概念的に「整合」していること。
- 一人称による記述は、研究者を研究の中に位置づけるため、ビッグQにとって良い実践である。
- 論文内で内省性が現れるべき場所は規範的であるべきではない。

BQQRG: *Big Q*に不慣れな査読者・編集者向け注記 (抜粋)

- 質的研究において、また特定の研究課題、方法論、探究の実践などにおいて、適切な参加者数／データ項目数を構成する要素について、広く合意は得られていない。
- 規模が大きいほど本質的に優れているわけではない——データの質（研究課題への対応／方法論との関連性）が大切。
- ビッグQの視点においては、「古い」データ自体が原稿を却下する正当な理由とはならない。
- 透明性のある研究とは、研究上の課題や予期せぬ展開の開示、そして研究焦点が時間とともに変容した過程の明示によって特徴づけられる。
- ビッグQにおいて、研究者の「影響」は本質的に内在するものと理解される。したがって問題は「影響を受けたか否か」ではなく「どのように影響を受けたか」が問題となる。
- ビッグQ研究では、全人口の知識や文脈を無視した一般化可能性が目的ではないため、別のコミュニティ／グループ内でこのテーマを研究することを提案することは（本質的に）意味をなさない。

CMCの執筆・査読ガイドを作りたい

それにあたって、しっかりと検討すべきこと

1. CMCは一事例の研究で一般化可能性（普遍性）がないのでは：事例研究の**普遍性問題**
2. 解釈主義に属するCMCの学術性は、実証主義による研究の学術性とどのように異なるのか：CMCの**学術性問題**

これらをしっかりと検討すると、CMCの執筆・査読ガイドができるのではないか。

本日の話題

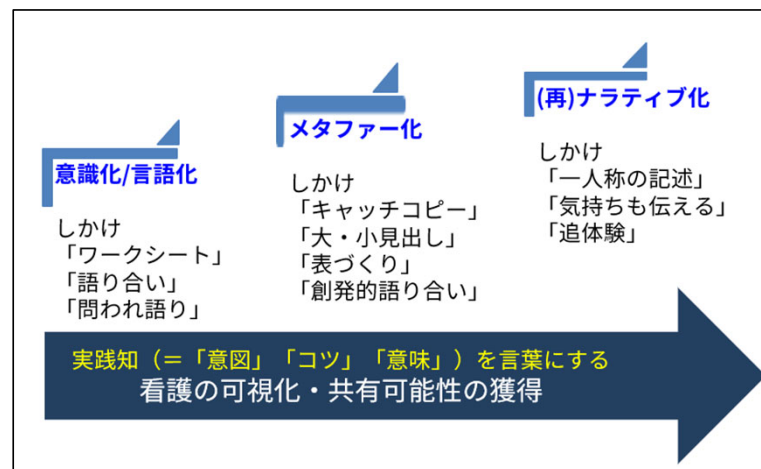
- ① 優れた実践を可視化・共有可能にしたい
- ② 査読の経験
- ③ Big Qとsmall q とBig Q Qualitative Research Guide (BQQRG)
- ④ **事例研究の普遍性問題・CMCの学術性問題**
- ⑤ CMCの執筆・査読ガイドの提案

一事例が持つ普遍性：河合隼雄（家高, 2025, CMC書籍第7章 p.136-138）

- 不思議なことに、登校拒否の事例を聞いているのに、自分の吃音の子どもの事と完全に重なることはありうる。
- 事例研究ということが（中略）言っている事実を超えて、もっとすごいことをみんなに伝えているし、皆さんもそれを持って帰られるから、次の臨床に役に立つということになっているのではないか。
- 事実を事実として聞いて役に立つ役立ち方と、事例研究を聞いて役に立つ役立ち方は違っています。
- 事実に伴う**内的体験**を伝え、**主体的な「動き」**を相手に**誘発**する。
- **事実に加えて、内的体験に基づく臨床の知が伝達されることによって、個より普遍に至る道が開かれる。**

CMCの普遍化の過程：「読者らの仕事」の存在

- 著者らの仕事
1. ナラティブ・語り合い・問われ語り
 2. メタファー化
 3. 研究メンバー・著者に起きる触発
 4. 大見出し・小見出し（創発的語り合い）
 5. (再)ナラティブ化



- 読者らの仕事
6. 追体験：著者の経験を読者が自分の経験であるかのように体感する
 7. 読者に起きる触発：
 - ・ 間主観的理解
 - ・ 世界観・患者観の更新
 - ・ アナロジー（類推による読者の経験の再構築）
 - ・ 連結化（読者による主体的な「動き」の誘発）
 8. 行動変容：更新された世界観・患者観・コツに基づく実践への新たなとりくみと成功
 9. 共有化：人々の間での世界観の拡張（普遍化）

CMCの学術性（案）

定量的研究	Small q (Lincoln & Guba, 1985; 宮田、大久保、吉江、甲斐, 2011)	Big Q 構成主義的グラウンデッドセオリー(Charmaz, 2014)	CMC
再現（可能）性 Reproducibility 信頼性 Reliability	一貫性 Dependability	記述なし	事実関係との適合と合意
客観性 Objectivity	確証可能性 Confirmability	記述なし	理解可能性
内的妥当性 Internal validity	信用性 Credibility	信用性 Credibility 共鳴性 Resonance	迫真性（リアリティ）
一般化可能性 Generalizability 外的妥当性 External validity	転用可能性 Transferability	有用性 Usefulness	触発性 (inspirability)
新規性 Novelty	記述なし	独創性 Originality	
記述なし	記述なし	記述なし	良き実践

事実関係との適合と合意 (再現性・信頼性にあたること)

事実関係との適合

- ケア実践は**生身の身体に提供されている**：基本的な事実関係まで、個別の人間の解釈に依存するという立場をとることは不適切。
- 「いつ手術を受けたか」「いつ退院したか」といった**基本的な事実関係は正確であるべき**。看護記録などにより確認し正確であることを求める。

研究メンバー間での合意

- 1人で解釈すると、その個人の文脈だけに影響を受けた**系統的な解釈のずれ**が発生する可能性。
- **複数の研究メンバーによる継続的な検討と解釈の共有や合意**（共通の意味を創り出す・産み出す過程）の手続きを求める。
- ひとつひとつの実践の**文脈全体との整合性**を手がかりにする。

理解可能性 (客観性にあたること)

- 意味を背負った実践の共有は、ケア提供者自身の主観を前提とするため、**客観性を求めることは不適切**
- たとえ主観と言えども、読者が著者（ケア提供者）の主観になるべく接近できるように**適切で十分な説明**があることを求める。
- 研究チームでの対話を通じて、**著者（ケア提供者）の人生の文脈や価値観を意識化し記述**することを求める。

迫真性（リアリティ） （内的妥当性にあたること）

- **読者による著者の経験の追体験を可能にする**ために、ケア実践の本質的な意味を的確にとらえ、それを生き生きと伝えられることを求める。
- 「大見出し」「小見出し」が実践を的確に表しているか。
- 「表」はケアのプロセスの全容をわかりやすく示しているか。
- 記述はリアリティがあり十分か。

触発性 (inspirability) (一般化可能性・新規性にあたること)

- 触発とは：

読者らが著者らとの間に、**共感性の高い間主観的な共通理解**を持ち、**その経験がきっかけ**となって、**読者らが自分の経験に新しい見方を持ち、自らの看護観・患者観・ケアの意味などについての観点が変わる**こと。それを通じて、ケア実践が変容すること。

- 読者に**触発**を生じさせることができるか。

良き実践 (実証主義的研究に対応する学術性は見られない)

- 対人援助の実践である以上、対象者に「何らかの望ましい変化」を導出した実践を取り扱うことは大前提
- 「何らかの望ましい変化」をどのように定義するか？ >> ケア実践はプロセス。一つ一つの行為を文脈抜きに個別に評価することはできない。プロセスが積み重なって、良き結果に至る。**全体の整合性から「よき実践」であったかを読み取る。**
- 共有可能にしたい知は **Phronesis** : 「**先の予測が難しい中でも目の前の患者にとって最善のケアが何か分かり行える**」知である。

本日の話題

- ① 優れた実践を可視化・共有可能にしたい
- ② 査読の経験
- ③ Big Qとsmall q とBig Q Qualitative Research Guide (BQQRG)
- ④ 事例研究の普遍性問題・CMCの学術性問題
- ⑤ **CMCの執筆・査読ガイドの提案**

CMCの執筆・査読ガイド（案）

良き実践に関する、**正確で偏りがなく**かつ**理解可能**で**迫真性**のある事例研究が**触発性**を持つ。

良き実践：

- ① 対象者になんらかの「望ましい」変化・展開を導出しているか。
- ② 全体の整合性から見て「よき実践」であったか。

事実関係との適合と合意：

- ③ 基本的な事実関係を記録等で確認したか。
 - ④ 複数の研究メンバーによる検討・合意でバランスの取れた解釈になっているか。
- ※データ収集の文脈性・データ解釈の経時的更新性から、従来と同じ意味の再現可能性は適さない。

理解可能性：

- ⑤ その事例の文脈を踏まえて実践の展開の様子を十分に詳細に記述し、その中でのクライアントや著者〔実践者〕の認識や意図、感情等を読者が理解・納得できるよう記述されているか。
- ※経験は社会的に構成されるという考え方に基盤を置いており、従来と同じ意味の客観性は適さない。

迫真性：

- ⑥ 大見出し・小見出しは実践を的確に表しているか。経験の記述はリアリティがあり十分か。

触発性：

- ⑦ 読者に該当事例を追体験することを可能にし、間主観的な共通理解が生まれたか。
- ⑧ 追体験が読者の実践とのアナロジーを可能にし、読者が自分の実践を再構成して揺さぶられたか。
- ⑨ そこから読者に変化（知覚・理解の更新・拡張）が起きたか。

終わりに：査読者のスタンス

- エピソード記述の『理解』には、読み手の態度が不可欠である・・・客観主義的な科学観を持ってエピソード記述を読むと、そこには主観的な体験しか書かれておらず、何の重要性もないと思われる。。。大事なことは、**書き手と同じ地平に立とうとして、書き手の立場に身を置き、その内容を書き手の立場から読み、書き手の意図を捉えようと努めること。**

(鯨岡峻 (家高, 2025, CMC書籍第7章 p.140))

- テキストの解釈は**解釈者の積極的な協力を必要とする**。・・・それは会話におけるように、**解釈者が、テキストの著者が意図するように思われるものを「傾聴」する**のである。(Helmut Danner, 2021, pp.87-88)

結論

明日の交流集会71
「ケアの意味を見つめる事例研究」を使って研究してみよう
(8:30 – 9:30 第15会場 1F展示ホールB-6)
お待ちしております！

- 看護の実践知を可視化・共有可能にする研究方法を検討して、「ケアの意味を見つめる事例研究 (CMC)」の方法を開発した。
- CMCは解釈主義のパラダイムに基づく研究 (Big Q)なので、**実証主義のパラダイムに基づく研究 (small q)と同じ査読基準は不適切**である。
- Big Qのための執筆・査読ガイドができたが、Big Qの事例研究であるCMCには別個の執筆・査読ガイドがほしい。
- 事例研究の普遍性・CMCの学術性の検討をもとに、CMCの執筆・査読ガイド案を開発した。
- 論文査読にあたり、**実証主義のパラダイムに基づく研究のための査読基準とは異なる査読基準も活用することを提案**したい。

謝辞

本発表の準備にあたり、惜しみないご助言・ご協力を賜ったCMC検討グループの皆様に深謝いたします（順不同・敬称略）：雨宮有子、柄澤清美、吉田滋子、家高洋、望月由紀、野口麻衣子、角川由香、仁昌寺貴子、山花令子、池田真理⁸⁵